

論 説

東アジアの愛国主義イデオロギーに関する試論

田 村 安 興

目 次

はじめに

1. 日本の愛国主義とその特質
2. 東アジアの愛国主義と国民意識
3. 日韓歴史認識の原点

むすび

はじめに

近代の東アジア諸国は相互に良好な友好関係を維持した時期はほとんどなかったといっても過言ではない。東アジア諸国の開国以降、この地域では西欧列強と日本主導による、紛争の解決が志向され、長く続いた植民地支配は諸国家間に困難な過去をもたらせた。隣国間は経済的には交流しつつも、政治、社会、文化面における真の友好関係を築けず、第二次大戦後60年を経た今日に至るも、東アジアの国際関係はむしろ悪化しつつある。

東アジア諸国間における国際関係の背景には、互いに強烈な個性を持った愛国主義があった。愛国主義・ナショナリズムの性格には、国家によって多様な変異がありうる。中国・韓国の愛国主義教育は反日歴史教育と一体である。それだけ過去の日本は東アジア全体にとって脅威であった。愛国主義は国家統治のイデオロギー的側面があることは無論であるが、その根底には歴史的に形成された社会心理としての集合的無意識がある。

本稿の課題は東アジアの社会思想に関して、政治によって左右されてきた互

いの愛国主義を対象として、その根拠となる東アジア諸国の歴史観の源泉ともいべきものを明らかにしようとするものである。

1. 日本の愛国主義とその特質

一般に広義の愛国主義はさまざまな側面と要素、特質を持っている。愛国主義イデオロギーを構成する要素は以下の4つの側面がある。

- ① 民族・共同体への帰属意識の延長として発生する社会意識
- ② 危機に瀕した国家や政権が国内対立を緩和するための国民統合策としての側面
- ③ 他の国家を支配するためのイデオロギーとなる場合
- ④ 宗教や神話によって支えられた集合的無意識から派生する社会意識

愛国主義は国民国家の成立が前提であるが、必ずしも国民国家の成立が必須ではなく祖国を失った民族、国家を持たない民族、また宗教・宗派集団が擬似国家である場合においても愛国主義は発生する。民族、文化、宗教、言語、社会意識、価値観などを共有する国家は愛国主義が強化される素地がある。

愛国心は国や地域に対する漠然とした愛着をさす。国家を植民地支配によって失った民族は、愛国心、愛国主義そのものが消失する。愛国心、愛国主義は国家の存立、独立するための要件でもある。それゆえに為政者によってしばしば国家統治の道具として重視されてきた。民族主義運動や独裁政権は愛国主義を利用する場合もあればコントロールできず、距離をおく場合もある。

愛国主義は従来さまざまに定義されてきた。愛国主義の主体について、フヒイテは愛国主義の主体が種族的有機体、言語、均一民族を基礎とする共同体であると規定した。¹ これに対してルナンは共同体そのものを愛国主義の主体に求めず、共同体のために奉仕する道徳的理念に求めた。²

日本の場合、近代明治国家は共同体を国家の末端組織に包摂し、しかも国民だれしものが反論できない強固な愛国主義組織に共同体を変えたところに特質が

¹ フヒイテ『ドイツ国民に告ぐ』石川達三訳 玉川大学出版社 1999年

² ルナン『国民とは何か』鶴飼哲也訳 河出書房新社 1997年

あった。一般にナヨナリズムの精神的要素が愛国主義であることは誰しも異論ないところである。愛国主義は程度の差はあるが、個人が所属する国家・共同体の意識によって規定される側面が強い。共同体の性格、宗教、国家形態、民族問題は愛国主義の性格を規定する。

西洋キリスト教諸宗派の社会、イスラム諸宗派の社会、東アジア諸国における愛国主義では性格を異にする。キリスト教社会やイスラム社会は社会奉仕への理念が愛国主義の基礎となる。東アジア諸国は国家としての歴史と交流が古く、かつ宗教よりも共同体、民族の論理が優先し、かつ相互に交流・対立しあった長い歴史をもっているために各国の愛国主義は歴史的な関係に左右されてきた。世界には多様な愛国主義、ナショナリズムが存在する。欧米の国家において個人の自立、自由な個人を前提に成立した契約型社会が生まれた。アジア社会は共同体、同族に個人が吸収される。宗教が政治に色濃く影響する社会では宗派が愛国主義と結合される。かつてアジア社会では個人の自由は共同体への反逆となり、国家に反する行為であった。

日本などのアジアの愛国主義は、種族的な有機体、言語、民族的な同一性を基礎とした共同体を基礎とした。もともとアジア社会は共同体、地縁・血縁関係による結合論理が残っている地域が多く、神話や社会意識の深層としての集合的無意識が愛国主義の基礎となっている。自ずと東アジアの愛国主義は欧州と異なる性格を有する。

アメリカ型社会における国家統合の理念は、富の多数を握る保守派キリスト教教義による自由主義イデオロギーであり、これが愛国主義の源泉となった。世論で国家意思を決定するアメリカ合衆国の政治はアンチテーゼとしてのターゲットが必要である。アメリカにとってのターゲットは19世紀以来、黄色人種、全体主義国家、社会主義、イスラム世界、非西洋型民主主義国、テロリズム国家へと絶えず変化してきた。

日本の愛国主義は近代国民国家成立とともに誕生し、第二次世界大戦前の日本は国体護持と愛国主義教育が一体となったために、戦後一時期まで愛国主義の議論はタブーとなった。日本の支配層は明治以降、共同体を国家機構に統合する原理として愛国主義教育を徹底して実行した。その際官僚機構だけの力で

はなく、民権派などの政党派や民間知識層の果たした役割が大きかった。

国内でリベラル派と称される人ほど愛国主義形成に積極的役割を果たした。内村鑑三は明治27年に出版した書『地人書』において、スペンサーによる愛国心の定義を引用して「愛国とは自利主義を自国に適用せしもの」³と述べた。また日清戦争直前における内村の愛国心の定義は「真正の愛国心とは宇宙の為に国を愛するを言ふなり西隣もし西洋を学ばんと欲するか、必ず我より之を学ばん、東隣もし東洋の長を取らんとするか、必ず我に於て之を認めん、両洋我に於て合す」⁴とし、国学の祖、本居宣長の次の歌で小論を締めくくった。“さし出る朝日の本の光より高麗もろこしも春をしるさん”と述べた。日本が東アジアの盟主たる位置に立つことによって、西洋の進んだ文化を東洋に及ぼそうとするという建前が彼らの愛国主義と脱亜の理念であった。内村ら知識人が日清戦争後において果たしたイデオロギー的役割は大きかった。日清戦争前の内村鑑三の愛国主義はすでに超国家主義、軍国主義にまで昇華している。内村鑑三をはじめ、福沢諭吉、徳富蘇峰、中江兆民、植木枝盛らもそれぞれの政治団体をもつ愛国主義者であった。愛国主義のルーツは幕末期における国学の勃興にさかのぼり、その完成は明治維新时期日本外交揺籃期であった。

Erich Fromm はファシズムを支えたイデオロギーの内的構造は、伝統的因習への無批判的同調、民族主義、権威と威光への屈服、弱者への攻撃性、内省を欠くことなどをあげた⁵。日本を含む東アジアの愛国主義イデオロギーは、開国時には閉鎖的な排外主義と同義であった。その後日本の近代化によって、日本の愛国主義は近代主義と結合した。

明治維新後、日本国民の集合的無意識の神話は、不平等条約を契機とする西洋コンプレックスと対韓外交問題によって、眠っていた日本のナショナリズムを覚醒させ、攻撃的にした。アジアの開化と近代化を旗印にした侵略の論理を支えたイデオロギーは皇国神話であった。

愛国主義は20世紀に重要な役割を果たした。強力な軍事力を有する大国の国

³ 内村鑑三『地人書』明治27年 復刻版1942年 岩波書店 172頁

⁴ 内村鑑三 同上書

⁵ Erich Fromm. “The Sane Society”『正気の世界』中央公論社 昭和49年7月

家主義は国際社会に強い影響を及ぼすが、国家主義と国際性とは二律背反である。国際性のない国家主義、愛国主義は超国家主義に発展する。戦前の日本の愛国主義は民族神話、民族宗教を基礎としていたことにおいて、前近代的性格を脱していなかった。

明治の日本の愛国主義は内治と同時に台湾、朝鮮、満州・大陸を同化し日本化する目的があり、アジアの日本化はアジアグローバリズムと同義であった。これに対して、西洋社会の侵略は宗教に先導された。西洋社会やイスラム社会の愛国主義は普遍性を有する世界宗教を持っており、強制によらず人心を掌握するイデオロギーを持っていた点で、他国にも愛国主義を強要した国とは異なっていた。

2. 東アジアの愛国主義と国民意識

明治以降の日本は一方で国体を明徴とした愛国主義教育を徹底しつつ、アジア主義、国際主義を標榜してきた。大正末期以降において、一時期の国際協調路線は軍国主義に抹殺される一方で、アジアにおいては建前としての国際主義が貫かれた。それが、侵略の隠れ蓑であったとしても、常にアジアとの一体性、文化の交流、経済と一体化した社会の交流を前提にしていた。これに対して戦後の日本のアジアへのスタンスはひたすら経済を優先し、アジア主義の抜け殻さえも継承しなかった。戦後の指導的な政治家もまた戦前の侵略の歴史を直視してアジア諸国と向き合おうとせず、経済援助と表面的な謝罪で糊塗して、外交上では平和主義を貫いてきた。

日本のアジアに対する歴史教育に関して、戦後教育は決して十分なものを提供してこなかった。一方で、中国、朝鮮半島における歴史教育としての愛国教育はこの地域の優勢な反日世論を育成してきた。

この問題に関する社会意識について、次のような調査資料がある。調査は朝日新聞社が2005年3月において東アジア3カ国の各世代に調査したものである⁶。

⁶ 『朝日新聞』2005年4月27日

有効回答は韓国1500人、日本1781人、中国2160人である。以下3国の対外認識、歴史認識に関する回答を列举した。

- ① 日本が嫌いと回答した人は、韓国63%、中国64%で、圧倒的多数の国民が日本は嫌いと回答した。日本も両国に対して好きより嫌いが上回っている。
- ② 靖国神社は軍国主義の象徴と回答した人が、中韓両国では約60%、日本では10%であり、日本では戦没者を追悼する施設と回答した人が66%を占めた。
- ③ 日本への歴史認識の評価は今後解決可能かとする問いは、謝罪によって解決するとした人は両国で40%以上であった。
- ④ 中韓両国の歴史認識にとって影響が大きいものは、新聞やテレビ報道が影響すると回答した国民は、韓国が44%、中国24%、学校教育が影響すると回答した人が、韓国32%、中国42%、記念館や歴史施設が影響すると回答した人は両国で11%、自分や家族の体験韓国が影響する人は韓国が11%、中国7%と最も少なかった。

以上の調査結果が示すものは、戦後60年を経て、すでに歴史認識が自らの体験より、教育の影響が圧倒的な部分を占めるに至っており、教育やメディアによって形成された国際認識が社会意識として定着していることを意味している。特に中韓両国の教育とメディアは、愛国主義・反日の源泉となっていたことを示している。

中韓両国では、反日教育を愛国主義に読み替えて国民統合の理念としてきた。反日愛国主義が国民の普遍的意識として定着するには、教育とメディアによる絶えざる啓発が有効であり、そのことによって潜在意識としての対日意識が、国民意識として各国に定着した。社会意識は教育と訓練によって集合的無意識に昇華し、自身の中の個人的無意識から社会的、集合的無意識になって反日が増幅されるという構図が中韓社会意識には存在する。

東アジアでは、戦後60年を経ても愛国主義をめぐって相容れない隣国関係にある。その要因は以下の点にある。

- ① 戦後の連合軍はイデオロギー上も、法的にも天皇の戦争責任を曖昧にしてきたこと。

- ② 日本の政権政党はしばしば東アジアへの戦争責任をも曖昧にしてきたこと。
- ③ 日本の官僚と政治家が人的にも組織的にも戦前戦後の連続性を有していること。
- ④ アジア諸国の政権が政権維持手段として反日愛国政策を実施したこと。
- ⑤ 東西対立が内戦と連動したこと。
- ⑥ この地域における軍事独裁政権の長期継続と民主主義が未成熟であること。

東アジア諸国では互いの認識の不一致が増幅し、未だ過去を清算して対等互恵の関係を築けていない。今日の東アジアにおける愛国主義の形成にあたって、意識以前に各国民に世代を超えて受け継がれてきたものが存在する。それは東アジアにおいて過去2千年以上にわたって継承されてきたものであり、今日の愛国主義はその基底に新たなイデオロギーが付け加えられたものである。

東アジア諸国で世代を超えて受け継がれたものとは、漢族においては中華思想がそれにあたる。中原を支配した漢族の世界観である中華思想は漢族の伝統的思想となった。中華思想はそれを補強する宗教、道教、陰陽道等によって補われ、漢族社会の集合的無意識となって継承された。中華思想には現実政治の中で宋、明など漢族が優勢な時代のみならず、蒙古人、満州人、日本人など漢族のまわりの少数民族によって一時期支配されたとしても、必ずや漢族が最も繁栄した宋代の復活があるという民族的精神がその根底にある。中華帝国は少数民族の文化に包摂されず、少数民族を同化したという歴史的事実によって、神話が補強されている。漢族の中華思想は前近代のイデオロギーであるが、今日においても大国主義を補強するイデオロギーとして引き継がれている。

このような民族意識の深層にある集合的無意識は漢族だけではなく、日本(大和)民族も万世一系の単一民族思想が日本国民統合の基層にあった。

朝鮮半島の人々もまた漢族の中華思想を継承し、朝鮮族的ミニ中華思想とも言うべき集合的無意識を継承してきた。彼らには中国黄帝伝説や神武神話に似た民族の神話をもっている。朝鮮族は神話上の架空の王、檀君王儉が西暦紀元前2333年に朝鮮を建国したとする檀君神話があり、西暦と並んで檀君暦が使われてきた。檀君神話を儒教・道教が支えた。漢族にとって朝鮮は地方政権か属国に過ぎないという意識があるが、朝鮮半島はそうではない。韓国国定教科書

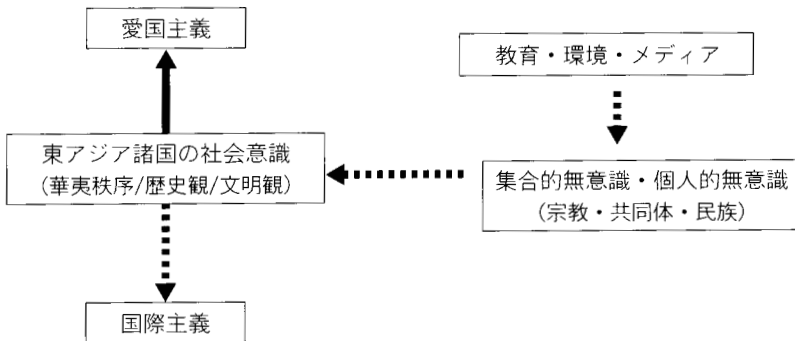
には、かつて朝鮮族が漢族を押しやり大陸の中原を支配したという神話とともに、神話世界の最大勢力版図が明示されている。⁷ 漢族と周辺少数民族は常に大陸支配をめぐる対立してきた。一時期少数民族が侵入しても、漢族が中原の経済を支配し、今日に至るも漢族から独立した少数民族の国家は少ない。

20世紀の超大国アメリカ合衆国において、市場経済、自由主義を国是とする愛国主義イデオロギーが国民の集合的無意識にまで定着した。東西を問わず、その国家の建国の精神は教育によって国民に浸透して社会意識となっている。

一般に、人間の自主的な意識より無意識が行動を規定する割合はるかに多い。人間の意識を支配する割合は、無意識が自覚的意識の数倍の割合を占める。無意識の中でも個人的無意識よりも集合的無意識がその社会的意識を規定する上で重要な役割を果たす。人間集団は教育やメディアを通じて繰り返し集団に流布されることによってあたかもその人間集団の集団的無意識にまで昇華する場合がある。それは政治や教育によって補強され、その集団の宗教的、神学的テーゼに合致した集合的無意識が形成される。

集合的無意識は国家の政治、経済、社会思想の深層を形成する。社会的無意識はナショナリズム、愛国主義、排他主義、民族主義の深層を形成する。それは社会の深層ではあるが、先験的に存在する無意識ではなく、あくまで人間社会の外部から教育、環境、社会風土によって形成・補強された社会的無意識である。

図1 東アジアの愛国主義と社会意識



⁷ 『新版韓国の歴史』国立韓国高等学校歴史教科書

C.G.Jungによると人間心理には意識、個人的無意識、集合的無意識の三段階があり、その中で集合的無意識は意識以前に存在する根元的諸理念であって、それは神話類型ともいべき民族に固有の深層に流れる要素であると述べた。⁸ 神話にその民族の先験的な世界観と価値観が凝縮されているとした。たしかに近代日韓歴史認識の相違の根元には集合的無意識としての神話間の対立があった。「神話類型は…神話構成要素でもあり同時に、無意識の自然発生的・個人的な所産としてほとんど全地球上にまたがってみられる、集合的性格を持った形式や形象のことを意味するのです。人間精神の諸もろの所産のなかでもこれら神話類型的モチーフの生みの親になっているのは、伝承や移住によってのみならず、遺伝によっても継承される部分であるように思われます」⁹ また「集合的無意識は—私たちがそれについて判断をくださうかぎりは—神話的なモチーフや形象のごときものから成っているかとおもわれる。それだからこそ、諸民族の神話は集合的無意識の真の代表なのである。神話全体は集合的無意識の一種の投影ではあるまいか」¹⁰ と述べた。

C.G.Jungは、個人の人間は異なる個人ではあるが共通の無意識を持つことによって表現の差、文化の障壁を越えて、深層では理解し合える人間になると考えた。C.G.Jung流の集合的無意識の一番深い部分は人類全体に共有されるものであり、終局的に人類共通に相互理解が可能なものとする点では、プラトンの善のアイデアに接近している。しかし、C.G.Jungは人類に共通する本能のようなものであると考えている点においてプラトンの哲学と相違する。また、C.G.Jungによると集合的無意識が、個人が獲得したのではなく遺伝によって先験的に存在するとみなす事も特異である。愛国主義の基礎となる集合的無意識は、共同体の成立倫理、神話・説話・民族宗教世界を不断に教育することによって子孫に伝わって民族や共同体の集合的無意識になるものであり、共同体、

⁸ C.G.Jung『心の構造』『ユング著作集2』昭和45年6月 日本教文社 112・113頁
“Seelenprobleme der Gegenwart von C.G.Jung” 1931

⁹ C.G.Jung『ドグマと自然的象徴』『ユング著作集4』濱川祥枝訳 昭和45年8月
日本教文社98頁 “Psychologie und Religion von C.G.Jung” 1940

¹⁰ C.G.Jung『心の構造』『ユング著作集2』昭和45年6月 日本教文社 112・113頁
“Seelenprobleme der Gegenwart von C.G.Jung” 1931

民族意識によって創造されたものである。

ナショナリズムを構成する社会意識の場合、その源泉となる集合的無意識は先験的なものではなく経験によって与えられた意識が集合的無意識に作用して形成される。特にナショナリズムを規定するものは意識的な要素、特に教育や政治、国家による作用によって集合的無意識に反作用し構成される。愛国主義の基底となる集合的無意識は決して先験的なものではなく、教育、宗教、歴史によって後天的に与えられ、それが無意識にまで昇華されたものである。愛国主義イデオロギーに普遍性を与えるものは、国際主義教育である。国際主義教育を徹底することによってこそ、文化、言語、社会の一体化がはかられ、偏狭なナショナリズムは解消され、普遍的なイデオロギーとなる。20世紀の超大国は一様に国際主義を建前として掲げたが、内実は一国ナショナリズムを背景とした国際主義であった。

しかし、C.G.Jung は人間意識の一番深い部分は人類全体に共有される本能的、先験的なものであり、人類は異なる個人、共通の無意識、文化の壁を越え、深層では理解し合えると考えた。C.G.Jung によるそれらの関係は必ずしも整理されてわれわれに提示されえていないが、今日の愛国主義イデオロギーに関する社会意識と集合的無意識の関係を示唆するものであった。¹¹

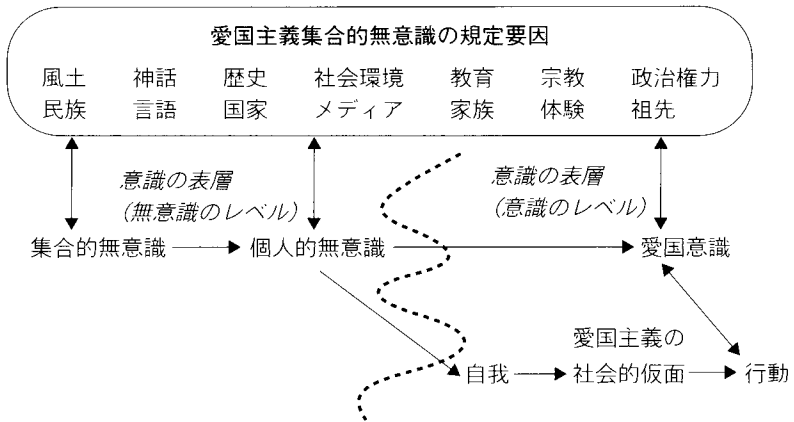
図2に社会意識の概念を示す。民族、宗教、言語、風土、神話、歴史、社会環境などは個人の意識が形成される前提であり社会的意識が形成される上の基層をなす。これに、個人の体験、教育、政治、家族、メディアの影響が個人の意識に反作用する。

3. 日韓歴史認識の原点

華夷秩序に組み込まれた中韓とその外延部に位置する日本はもともと大陸側からみて対等な位置をもつ国家ではなかった。西洋諸国の軍事圧力と日本の早

¹¹ C.G.Jung によると集合的無意識は次の4層よりなる。①自我 ②個人的無意識 (personal unconscious) ③集合的無意識 (collective unconscious) ④ペルソナ (社会的仮面)

図2 愛国主義イデオロギーと集合的無意識



期近代化は、この地域の社会意識に浸透している数千年の華夷秩序に代わる新たな秩序の形成を意味した。

日本によって開国が強要される以前の韓国社会は開国と近代化をめぐってイデオロギー上の対立があった。その後において韓国と日本が異なったのは、天皇が統一政権の勝者として神聖な権力を獲得したのに対して、李王朝は政権自体が末期的状態にあり、それは清国も同様であった。東アジア社会の原点を探るとき、両国社会心理の深層に横たわる思想的・宗教的世界のミスマッチが現実政治を支配し、そのことがこの地域の真の友好を阻んできた。

鎖国状態が継続した東アジア諸国が世界市場に開放されるとき、東アジア諸国の思想的、イデオロギー的特質が国家間の交渉に大きな影響を与えた。特に日韓関係は古代世界から続く神話的連鎖が両国関係の社会思想を支配してきた。大陸と日本は立国の支柱たる神話をそれぞれ有している。日本は皇国神話が幕末の改革・革命イデオロギーとなった。19世紀末の朝鮮半島では政権自体は末期的退廃をきたしながら、檀君神話は神話的意味を失っていなかった。清朝も同様に道教を根底とする黄帝神話が漢族社会統合の象徴であった。明治維新は天皇をさしおいて統治してきた武家政権を打倒し、天皇親政を目指した王政復古でもあり、維新は神話世界の復活を意味した。制度的には郡国制から郡県制への移行であり、天皇を中心とする近代国家の成立を志向したが、同時に成立

したばかりの統一国家日本は、欧米との不平等条約という重い課題を背負っていた。明治国家の黎明期に日本政府は困難な外交問題に直面した。それは欧米列強との不平等条約と、以下に述べる日韓関係における国書受け取り拒否問題であった。開国後数十年経過した20世紀の日本は外交の屈辱体験をバネに愛国主義を利用して近代化した。

国民国家の成立期は日本の場合愛国主義の形成時期と同じ時期であった。日露戦争後に国民国家が形成されて以降日本の中に異胎が生じた、と評した歴史家がいたが、国民国家の設計図は維新前から形成され、明治10年代において国民国家のモデルというべき論争が民権派と政権諸派との間であった。後に異胎と称せられるものは明治初期においてすでに形成されていた

維新直後の日韓外交は、明治元年の韓国側が日本の国書受け取り拒否に始まる。その後、大院君政権による鎖国政策の堅持と外交における古い慣習・儀礼へのこだわり、江華島条約による開国と日本への視察団・留学生派遣、壬午・甲申事変までの日韓関係は両国の国論を分裂させる事件の連続であった。

1868年(明治元年)12月19日、明治政府の使節が朝鮮半島の釜山に出向き明治新政府の樹立を通告して国書を渡そうとした。しかし、大院君政権下の李朝は国書の受け取りを拒否した。その理由は国書の文面に「皇上」「奉勅」の文字があったためであった。国書中の署名・印章ともに慣例と異なっていることが理由とされたが、単なる形式的な問題ではなく根深い歴史観と国家観の相違が根底にあった。李朝が国書受け取りを拒否した理由は「皇」の文字が華夷秩序の最上位に位置する中国皇帝にのみ許される称号であり、「勅」は皇帝の詔勅であることを意味した。朝鮮側にとって、日本は華夷秩序の末席に位置する蛮族であるという意識が根底にあった。

一方維新後の日本にとっても幕府時代とは異なる外交を行う必要があった。日本は天皇親政に復した政治体制になったことから、国書の文面は当然であった。また古代から朝鮮半島を日本が征服したという記紀の記述について、国学徒であった維新政治家は一様に認識を同じくしていた。彼らは幕藩体制の日韓関係が日本側にとって不平等外交であるという認識をもっており、日本側も朝鮮側の対応が無礼であるとの認識をもった。日本の新政府は、それ以後もたび

たび使節を送って交渉を続けたが、李朝は一貫して、文書の表現・形式がこれまでの慣例とは異なることを理由に、日本国書の受け取りを拒否し続けた。李朝は鎖国と排外主義を続けており、500年続いた彼らのブレーンは頑迷な儒学者であった。儒者は倭夷が洋化して衛正斥邪の対象であると非難した。

明治維新以降、日本側による大陸に対する認識は、それまでと違って、近代化＝西洋化に遅れた地域、非文明国という見方が支配した。朝鮮半島や中国が西洋、日本の影響力で徐々に近代化しても「半開」という見下げた論調がマスコミにも見られた。ところが、朝鮮半島でも日本を「野蛮」、「遅れた国」と見る隣国観が形成されており、明治維新以降もこの見方は解消されなかった。朝鮮半島を含む大陸では古代から日本を、「倭」「倭国」「蛮夷」などという蔑称を用い、朝鮮半島の庶民も日本人を特別の蔑称でよぶことがあった。また日本側にも第二次大戦前には蔑称を用いることがあり、時として今日においてもその残像が残っている。

東アジアの歴史観の根底にあるものは、大陸からみれば、夷狄、格下の日本が後発帝国主義国として韓国、中国を支配するようになったという、本来の序列に逆行した時期があったことである。秀吉による2度の朝鮮侵略は隣国関係に大きな禍根を残したが、徳川幕府成立を経て日韓関係はかつてない良好な関係となった。この時代においては徳川幕府側が朝鮮通信使に対する扱いが、朝廷に匹敵する厚遇したもてなしをした事に対して、幕府側からは控えめな朝鮮訪問が行われた。この時期の外交には華夷秩序を重んじた対応がなされていた。ところが、いち早く開国、文明開化した日本にとって日本以外のアジアは未開、野蛮であるにも拘わらず無礼な国であるという隣国観が明治維新以降一般化した。未開の朝鮮、台湾を文明化するために侵略、一体化は正当化された。朝鮮の「無礼」なる言葉は明治初年木戸孝允日記にもある。¹² 朝鮮の「無礼」を明治初期の政治家が繰り返し主張し、これが朝鮮への武力行使の口実となる。この国家への「無礼」は国家の面子の維持と同意義である。明治以降、満州事変

¹² 『木戸孝允日記』明治元年12月14日 木戸は岩倉に次のように建議したと日記に記した「使節を朝鮮に遣し彼無礼を問ひ彼不服ときは鳴罪攻撃其土大に神州之威を伸張せんことを願ふ」

に至る日本の戦争行為の詔勅には「無礼」がしばしばしばしば登場する。これは東アジアの愛国主義の情緒性、非論理性を反映している。

李朝朝鮮は建国以来、中国に服属する一属国にすぎず、日本に至っては華夷秩序の枠組みからも外されて千年近い時間が経過していた。韓国側の意識は、華夷秩序にも入れられず儒学後進国でもある日本が開国を一方的に迫り、中国への礼をつくさない文書自体に激怒した。明治初期の征韓論はそのような朝鮮側に対して提起された。日本側にとって朝鮮への不審を増幅させたのは、清が日本との間で、1871年(明治3年)に締結した「日清修好条規」では、「皇」の文字が不問にされたことであるにも拘わらず、朝鮮は敵対的な対応をしたことであった。

朝鮮に対する対応で政権の意見は分かれた。政府主導層は対朝鮮問題に対しては慎重であった。むしろ後の野党民権派側が強硬論を主張し、征韓論となって政府分裂の契機となった。これ以降明治20年代初期まで、征韓論から派生した民権派グループ諸派は土佐派をはじめ各派とも対外武力行使を主張するタカ派であり、政府主流派はむしろ財政と内政重視の穏健派であった。時代は民権派が主張する方向に展開し、日本の初期の愛国主義思想を普及した功績は民権諸派によるところが大きい。

明治政府最大のブレンであった井上毅は数多くの意見書を提出しているが、その中で政府への意見書「朝鮮政略意見」¹³において、ロシアの南下政策を防ぐためには朝鮮の独立が重要であり、あくまで対朝鮮協調外交を説いて民権諸派などの外征論を批判した。

朝鮮・中国側は、日本は文化が低い後進国であるという意識が社会的心理の根底にあり、日本に対して公式には表明しないが、かつて蔑視を込めた倭、倭寇とよんだ。日本は中韓にとって華夷秩序の朝貢にも入れない後進国であったにも拘わらず、近代化、開化、開国を主張した。このような華夷秩序を逆転させた日本外交への不満が中韓両国にはあった。

民間に広く浸透している対外意識はその地域の集合的無意識を形成する。東

¹³ 井上毅「朝鮮政略意見」明治15年9月17日

アジアの集合的無意識の根底にあるものはこの地域の神話である。朝鮮民族の建国神話は檀君神話であり、中国にも黄帝神話がある。しかし、戦前の日本は日本の皇国神話を輸出し、檀君神話を迫害した。日本にとって神話の輸出とグローバル化は外地と内地の一体化スローガン「内鮮一体」であり、そのことは同時に経済、社会制度に及んだ。神話の共通化に基礎をおいた一体化を日本は追求したが、東アジア諸国にとって日本は異質な皇国神話の国であることに変わりがなかった。

第二次大戦後の日本は、戦前の反省から最小の軍備と経済優先政策をとったが、アジアに対しては共同体内部でしか通用しないような曖昧な歴史評価と理念なき外交を展開した。戦後においても東アジア諸国の歴史は政治・社会の軋轢と支配・対立の歴史であったが、日本政府はアジア社会の相互理解と国際主義に基づいたアジア主義教育と外交は推進されず、経済援助・物的関係・商品交換が優先されてきた。東アジアの国際関係、特に相互の関係は近代以降に顕在化したものではなく、長い世代に渡って形成されてきたものであり、そのことを変えるためには真のアジア主義教育が国際的に行われる必要がある。

戦前において真の国際主義を実践上も貫いた思想家は新渡戸稲造ただ一人であった。新渡戸は日本の教育制度について「教育制度は国家あるいは国民よりも大きい器を無視すべきではない」と、教育は国家主義、愛国主義の狭い枠に閉じるべきではないとこの時代の愛国主義教育を批判した。また、新渡戸は次のように述べて、軍国主義的愛国主義が席卷した時代においても国際精神が発展する可能性を否定しなかった。「高官に偏狭な愛国者がいるにせよ自由の精神はより思慮深い人々を強くとらえている…我が国の教育に新しい国際精神が目覚めている」¹⁴と述べたが、新渡戸ほどの見識を持った国際人は今日の日本にいるであろうか。

東アジア諸国がそれぞれ自立した開国を実現しておれば日本より早く近代化し、近代武装した立憲君主制国家として他国の脅威となったはずである。独立した朝鮮半島への侵略は日本にとっては神話世界の再現であったが、大陸にお

¹⁴ 新渡戸稲造『日本人の特質と外来の影響』『全集第十八巻』620・621頁

ける神話を著しく蹂躪した。ともに実証のしようがない意識以前に存在する神話類型であり、民族に固有の深層に流れる要素であった。このような集合的無意識は為政者によって増幅され、利用されて国家イデオロギーとなった。放置すれば消滅するはずのものであるにも拘わらず、今日政治の力によって愛国主義高揚のイデオロギーとなった。

むすび

東アジア諸国の国民意識には集合的無意識の根源である神話があり、愛国主義教育はそれを強化してきた。愛国主義の根源となる神話によって愛国主義は集合的無意識となる。日本の皇国神話、朝鮮半島の檀君神話、漢族の黄帝神話がそれである。これらは国民意識の深層心理にあり、政治と教育によって強化された。それは国民統合には有効であるが国際主義の形成を妨げている。

東アジアでは支配・被支配の関係から未だ60年しか経過せず、被支配国の愛国主義の矛先は支配した国に向けられる。日本による大陸近代史に与えた影響は大きく、神話類型の対立が解消するにはなお数世代の時間を必要とする。

国際主義教育とアジア一体化教育が行われると国際主義精神は育つはずである。この地域の国家間の独立、交流、融合にふさわしい新たな集合的無意識が形成されるには長い期間にわたる相互の努力を必要とする。東アジア諸国は戦前戦後を清算して対等互惠の関係を未だに築けない責任は、相互の政治と教育にある。

愛国主義教育は政権維持に有効であり、今日の東アジア諸国のみならず明治維新以降の日本の政権維持に大きな役割を果たした。しかし愛国主義教育は国際主義教育と連動しなければ、前世代の集合的無意識と結合して排外主義を生む。東アジア諸国の社会意識の問題点は、一方で政権維持の柱と位置づけた愛国・反日教育の推進と、他方での政治の後進性が根深い反日社会意識をつくり、集合的無意識に反映したことによる。

C.G. Jung は人類に共通する集合的無意識が存在すると述べた。そうだとすれば、国際主義の集合的無意識が人類には備わっているはずである。しかし現

実社会の中で大きな勢力として国際主義が育たず、むしろブロック化が進行して20世紀前半の世界へと歴史は逆行している。

民族的偏狭性に陥りやすい傾向を免れないこの分野の研究は、多様性と複眼的アプローチが必要であり、国籍の主観を廃して客観化する上で東アジア諸国との共同研究の活性化が望まれる。